

Title	スポーツと医学
Sub Title	Sport and medical science
Author	浅野, 均一 (Asano, Kinichi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1966
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.6, No.1 (1966. 12) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00060001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ス ポ ー ツ と 医 学

浅 野 均 一*

生物の發育發達は、その個体の有する素質のみによって、そのまま伸展して行くものではなく、生後における第二次的生活環境によって大いなる支配を受ける。このことは、単に身体的なことのみでなく、知的にも、道徳的にもいえるのである。そして、近代生活をめぐる社会環境は、良い影響より、悪い影響を与えるものが激増しつつある。いわば「ひずみ」の中の生活と
いってよいのである。この「ひずみ」の排除への闘争は、人間生存への、重大な問題である。このためには、生活環境全体にわたっての研究と、対策とが、あらゆる分野においてなされなければならないのは、言をまたない。しかし、現代生活の中において生きぬくための、人間の適性を考えるとき、それは、全一体として、強力ならしめるべく、考えられるべきものであって、ただ単に、身体的健康のみであってはならないのである。

即ち健康であると同時に、知的にも、道徳的にも立派であり、社会に有能な者とならなければ真の適性とはいえないのである。かかる意味における適性確保に、所謂科学がその根底をなすものであるが、その一端を担う医学の研究進歩も、重大な役割をなすものである。

現代の医学は、その發展過程において、先ず人間の「静」の状態の研究より始まり、その基礎が作られ、次いで、「動」の状態への研究に發展しつつある。これはいうまでもなく、前述した近代生活の「ひずみ」に対する適性への対策である。一面において、この対策は、生産生活に対し、又は公害等に対してのものでもあるが、一面、現代生活へのより強い適性を造りあげる対策でもあるべきものである。この意味において、医学の体育・スポーツへの寄与は、大きな意義をもつものである。しかしながら、わが国のスポーツに対する医学は、ごく少数の医学者によって業績が発表されてはいたが、大正の末期、日本スポーツ界が近代化され、ようやく世界スポーツ界への仲間入りをする頃となって、スポーツに関心を有する医師達によって研究が進められ、昭和2年頃、時事新報社の好意によって、「スポーツ医事研究会」が発会して、毎月1回の集會がもたれ、活発な研究発表と討議が重ねられたことがその発足であったといえる。したがってその歴史は新しく、その当時における研究の多くは、ごく基礎的なものであ

* 慶應義塾大学体育研究所教授・所長

て、直ちにそれをもって、スポーツに応用寄与するまでに至っていなかったといえる。

1936年、ベルリンにおけるオリンピック大会の際、国際スポーツ医学会が開催され、私も研究発表を行なったが、発表された多くの業績も、基礎的な研究が多かった。その後、世界は大戦に突入し、わが国のスポーツ医学研究も国防医学的性格と変わり、戦力増強の一端を担うようになってしまったのである。したがって医学のスポーツへの真の寄与は、戦後にあるといえるのである。しかもそれは、短い年月の間に非常な勢いをもって、進歩発展をしたのである。私はこの事実を、ソ連のスポーツ界への参加に因すること大であるという見解を持っている。ソ連の真の目的が、単なるスポーツの強さを世界に示し、国力の偉大さを誇示するためのもののみではなかったことは、明らかであるが、強力な、国家形成へのあるべき国民の適性を向上せしめる手段としての体育スポーツへの40年以上にわたる努力と成果とが、スポーツの世界に、燦然と表現されたことが、世界への大なる刺激となったことは、いなめないのである。

ソ連の国立体育大学のオゾーリン氏は、「スポーツにたずさわることが、スポーツの記録向上のための手段のみでなく、若い人達の全面的な身体の鍛錬、健康増進の手段となった。チームワーク、友情、礼儀作法、規律等の美しい精神面における影響も、見逃し得ない。人間誰もが、記録保持者やチャンピオンにはなれない。しかし、健全な身体、スポーツ的な心身の完成、高度の労働力、教養は、誰もが欲するところである。この目的を広く宣伝することによって、ソ連のスポーツは文字通り大衆のものとなり、スポーツの層が極めて厚くなった」といい、そして、その裏付として正しい科学的なトレーニング方式が確立されたと言っている。

そして、トレーニングを行なうスポーツマンは、民族の如何を問わず、生理学、心理学、キネシオロジー、衛生学、スポーツ医学の法則に従うということを忘れてはならないが、しかし今まで、スポーツトレーニングの統一的システムを仮令概略的にも示してくれた国は、どこにもなかったので、多年の研究により遂に、ソ連「中央トレーニング協議会」が、ソ連式トレーニング方式の基本法則を作成することができたと言っている。

ソ連のトレーニング方式の原則的考え方は、「スポーツトレーニングとは、正しい衛生的条件と、細密な医学的・教育学的管理下において、スポーツマンのもつ機能的可能性を養成発達させる教育的過程である」とし、トレーニングを単にスポーツの練習ということだけでなく、トレーニングを教育と考え、トレーニングに選手作りに限らず「人間造り」という意味をもたせ、次の如き具体的目標をトレーニングの課題としてとりあげている。

1. 健康の増進と身体の全面的発達
2. スポーツ技術、作戦の把握
3. 道徳の向上、意志の強化
4. 専門競技に適應する身体的諸条件の発達

5. スポーツの実際的・理論的知識、衛生、自制に関する諸知識の獲得

そしてこれは新人より、スポーツマスターに至るまで鍛錬の水準に関係なく絶対必要なる要素とし、あらゆる課題を1年を通じて平行的に解決することが重要で、実際の経験から見てもまた科学的資料によっても、これらの課題を平行的に解決せずに段階的に行なう場合は、よい実績はあがらないとしている。そしてこれらの課題に従って有機的な関連を有するトレーニング過程を樹立して、成功をおさめたのである。

これらソ連のスポーツトレーニングに対する考え方と方式に表われたことは、スポーツトレーニングとは言え、これはまた直ちに、国民の広い意味の体力造りに通ずることが明らかであり、それは身体的にも、知的にも、道徳的にも、近代社会生活の中に生きてゆく、国民の適性づくりに他ならないのである。かくて、世界スポーツ界に示したソ連の高いレベルが驚異となり、そのよって来たる所に対する裏付けが、近代社会の中の、生きるべき適性につながることは、大戦後の、社会の中でのスポーツの比重を高め、この意味における社会的重要性が深まる因をなしたと言っても過言ではないと思う。

勿論各国においても、それぞれの見識と立場に立って、同じような傾向において、研究の発展をはかりつつあったが、そのテンポを早めたものはソ連の影響によったことは断言できる。各国は、体育研究所、体力医学研究所、国立のトレーニングセンター等を続々建設し、青少年の人造りに力を入れ、同時にスポーツ医学、体力医学の研究が盛んになり、フランスの如き古い伝統をもつ国にも、新しい体制のチェコスロバキヤにおいても、スポーツ医学が大学医学部の講座として設けられ、必須課目となり、ドイツでは、スポーツ医師の制度が確立し、今日では一流のスポーツコーチは高度のスポーツ医学の知識をもたざるを得なくなっている。

わが国においても、第2次大戦後、日本体力学会、日本体力医学会が結成され、スポーツ医学は体育学と共に活発なる研究をすすめ、昭和24年には保健体育は、大学においても必須課目となり、1964年東京オリンピック大会を機会に巨額にのぼる選手強化費の支出されたこともあって、スポーツ医学は、密接に各種競技団体と協力して大なる発展をとげつつあるようになった。

アメリカのジョージウィリアムス大学の著名な生理学者でスポーツ医学の権威であるスタインハウス教授は、「自由社会において理解されているところによれば、人間の適性は、個人の権利があらゆる他の人々によって認められるという社会構造の上にきずきあげられるべきものである。このようなことを学習するのに、子供のプレーの生活よりもよい場がどこにあるだろうか」と言っている。子供のプレーから青年のスポーツへと発展して行くことを思うとき、スポーツの医学の、この発展への奉仕は、重大な意味をもつものと言えるのである。

(三田評論41年7月号より転載)